

「プレゼンテーションから受ける印象の差異」 —オンラインと対面の学生自己評価から探る—

中村 公子・千葉 佳織*・白川 はるひ・吉川 尚志・苗村 晶彦・村木 桂子・高橋 佳子
総合教養センター

1. はじめに

プレゼンテーションは物事の魅力を伝えるための手段のひとつとして、また目標達成や生活の充実を目的として、幅広い世代で実践されている。AIが発展し、様々な業態が科学技術によって効率化された昨今においても、プレゼンテーションのように「人が話して表現する行為」そのものがなくなることはない。それどころか、大学生にとってプレゼンテーションはますます欠かせない能力のひとつとなってきた。理由のひとつは就職活動である。近年の就職市場においては採用の判断軸が従来の学力重視から人柄重視に移行していることは既知の事柄であるが、人柄やコミュニケーション能力がわかりやすく求められる現在の企業社会においては、言葉を用いて自分自身や自らの抱負を的確に話せることがますます重要になっている。二つ目の理由としては、プレゼンテーションが、その後の人生や職業の能動的選択を広げてくれる手段になるからだ。人生100年時代を迎えた今、転職や独立などが馴染みある選択肢となってきたが、自らの夢や人生の軸を能動的に考え、正しくそれを人に伝えられる能力を身につけることで、多方面にわたるキャリアチェンジが可能になることは言うまでもない。すなわち、プレゼンテーション能力は大学生が自らの未来を明るくする武器の一つとして備えておくべき能力なのである。

以上のような視点から、現在では数多くの大学が

入学後の早い段階からプレゼンテーションを授業に組み込み、時間をかけて指導するようになってきている。文部科学省の調べ(文部科学省、2021)によれば、「プレゼンテーション等の口頭発表の技法」を初年次教育に取り入れている大学・短期大学は、2009年の488大学(79%)から、2014年には589大学(80%)、2019年には632大学(85%)と、この10年間でその数を大きく伸ばしている。戸板女子短期大学でも初年次教育の一環として2015年より実施している「産学連携プロジェクト」¹において、企業に向けたプレゼンテーションを必須課題として実施している。しかしながら、2020年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延による授業のオンライン化に伴い、Zoomを用いてのプレゼンテーションを実施せざるを得なくなった。コロナ禍に若干の好転が見られた2021年度は、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド授業²が導入され、発表時には同一授業内で双方のスタイルを用いたプレゼンテーションを実施することとなった。いずれの教室にも教員がファシリテーター補助もしくは審査員(企業の担当者)のアテンド役として同席したが、終了後複数名の教員から、対面での発表とオンラインでの発表にはその受ける印象に違いがみられることが報告された。具体的には、オンラインで発表した学生のほうが自信をもって生き生きとプレゼンテーションに臨んでいたように感じられるというものであった。そこで本稿では、

*戸板女子短期大学契約講師、株式会社カエカ/スピーチライター

¹戸板女子短期大学では2015年度『港区芝地区養蜂事業』産官学連携を端緒として、初年次生必修の総合教養科目「戸板ゼミナール」(2021年度は「戸板ゼミナール1」と名称変更)において、企業とのコラボレーションによる「産学連携プロジェクト」を毎年度実施している。

²ハイブリッド型授業とは、オンライン授業と対面授業を組み合わせて実施する授業形態で、主なものは以下の3つ。対面・オンライン・オンデマンドを組み合わせて実施する「ブレンド型」、同一回に対面とオンラインで別々の内容を行う「分散型」、同一内容を対面とオンラインで同時に行う「ハイフレックス型」。当該授業はハイフレックス型で実施した。

対面で行うプレゼンテーションとオンラインで行うそれにはどのような違いが生じるのかについて、その理由とともに分析する。さらに、ポストコロナ時代にふさわしい初年次教育としてのプレゼンテーション授業の在り方を模索する。

I. 先行研究とリサーチクエスト

先述の通り、プレゼンテーションを初年次教育の一環として実施している大学は増加の一途をたどっており、それに伴って近年数多くの実践報告や提案がなされている。

山田ほか(2016)は初年次教育の要にアカデミックスキルの習得を挙げており、プレゼンテーションもその一つとしている。実施に当たっては、授業設計と質の保証の重要性を論じている。村上ほか(2012)は、リフレクションを用いたプレゼンテーション教育を提案している。理由としては、プレゼンテーションが学生の気づきを促す方法として非常に効果的であることを挙げている。また、コロナ禍におけるオンラインでのプレゼンテーション教育について、仲川(2020)はプレゼンテーションとそれに付随するグループ活動を通して「当初オンライン授業に不安を抱いていた学習者も、仲間とのインターアクションから、意欲が高まったことは、協働学習の利点であろう」と、その効果を高く評価している。戸板女子短期大学においても、前年に行った「産学連携プロジェクト」でのオンラインプレゼンテーションのふりかえりから、学生は教員側の予測をはるかに超えて、相互に助け合いながら発表を進め、機材トラブルなどにも臨機応変に対応していることが明らかにされている(村木ほか 2020)。しかしながら、これらの研究において検証されたデータは対面もしくはオンラインどちらかのものであり、両者を比較検討した先行研究は見当たらない。したがって、今回戸板女子短期大学で行われたプレゼンテーションの際に教員たちが感じた両者の差異を解明することはここではまだ難しい。しかし、本多(2011)の研究から、対面でスピーチを行う場合、開始前2分間とスピーチ開始後1分間の心拍数が高くなることが

分かっている。加えて、今回の発表時の表情や声、ジェスチャーなどからも、この違いは学生の緊張感などの心理状態から生じるものであると推測することができる。そこで、この推測を本研究のリサーチクエストとして、プレゼンテーションにおける対面時とオンライン時に生まれる印象の差異を学生の自己評価から比較検証する。

II. 実施内容

戸板女子短期大学における産学連携プロジェクトは、1年生前期の必修授業である「戸板ゼミナール1」の中心となるプログラムで、服飾芸術科、国際コミュニケーション学科、食物栄養科に在籍する新入生全員を対象に行われている。学科毎に企業³から与えられたテーマに沿って、課題解決に向けた協働学修に取り組み、その成果である提案をプレゼンテーション形式で行うものである。2021年度は、以下の授業スケジュール、テーマおよび形式で進められた。全員が発表を行った予選プレゼンテーションに対するふりかえり(アンケート)を基に、その結果を分析し考察を試みた。

1. 授業スケジュール

〈図表1〉 産学連携授業スケジュール

日程	3学科の授業内容
① 5/10	事前課題 産学連携とは、テーマ発表、動画配信と個人ワーク提供
② 5/20	企業からの企画説明・質疑応答 個人ワーク(個人案作成)
③ 5/27	グループワーク開始(各自の提案発表)、質問対応・アドバイス
④ 6/3	グループ内討議(調べもの、案をまとめる)
⑤ 6/10	グループ内討議 (企画の再検討、まとめ、PowerPointの作成)
⑥ 6/17	グループ内討議 (PowerPointの完成、発表原稿作成、1分プレゼンの練習、評価表(ループリック)説明、プレゼン資料最終チェック) →提案資料提出
⑦ 6/24	予選プレゼンテーション(全員) 1人2分間プレゼンテーション(服飾)(国際) 1人1分間プレゼンテーション(食物)
⑧ 7/1	決勝進出者のみグループワーク
⑨ 7/8	決勝プレゼンテーション 予選通過6~8グループが発表3分+質疑応答2分=5分間のプレゼンテーションを実施

³本稿において、企業名等の敬称は省略し、敬意表現は用いない。

※食物栄養科はこれ以降もグループ活動が続くが、ここでは授業内のスケジュールのみ提示した。

2. 各科のプレゼンテーションテーマ

(1) 服飾芸術科

株式会社 EDWIN より「普段デニムを履かないシチュエーションで若者にデニムを履いてもらうための施策や、デニムの魅力を発信するイベントの考案」というテーマが提示された。若者のデニム離れが進み、デニムに対する関心が薄れているという企業側の課題に対し、その解決に向けた取り組みを行った。最終目標は、学園祭でのファッションショー実施とした。

(2) 国際コミュニケーション学科

TSUTAYA 田町店より「30～40代の田町で働く女性をターゲットにイベント案を考案する」とのテーマが与えられた。田町店はオフィス街の店舗であるにもかかわらず、従来男性会社員に比較して女性の来客数が少ないという課題があった。そこで、当該地区で働く30～40代の女性をターゲットに課題解決に向けた取り組みを図ることとなった。最終目標は学生が考案したイベントの実店舗での実施であった。

(3) 食物栄養科

製菓製造販売企業である株式会社ランビックより「フードデリバリーで届いた時に“ハッ”とするケーキを考えよ!」というテーマが示された。進行過程でのアドバイスや審査においては、ホテル ザ セレスティン東京芝にもご協力いただいた。決勝プレゼンテーションで選ばれた3グループは試作や試食を繰り返して実際に店舗で販売し、2ヶ月間で売上が一番高いグループを「最優秀賞」として学園祭で表彰した。

3. 予選プレゼンテーションの発表形式

全学科とも各企業からのテーマ提示後にまずは全学生が個人でアイデアを作成する。その後指定されたグループでそれぞれのアイデアを持ち寄り、協働学修を経てグループとしてのアイデアを1つ決定、ブラッシュアップされたものを予選で発表するとい

う形式をとった。発表時、グループのメンバーは分散され、各グループの代表としてそれぞれの発表場所でプレゼンテーションを行った。

(1) 服飾芸術科と国際コミュニケーション学科

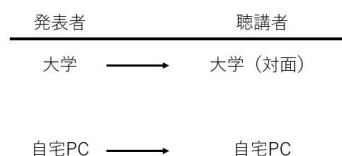
服飾芸術科と国際コミュニケーション学科では、対面受講の学生は教室内で発表し、聞き手となる学生も同一教室内にいる中で行われた。オンライン受講の学生は自宅から Zoom に接続し、ブレイクアウトルーム機能によって各自割り当てられたでルーム内で発表を行った。

〈図表2〉 服飾芸術科・国際コミュニケーション学科 発表環境

	聞き手の人数	発表場所	教職員	発表環境
服飾対面	16～17人	教室	1人～2人	教室図表4参照
服飾Zoom	16～17人	自宅	0 (随時入室)	Zoom
国際対面	11～12人	教室	1人	教室図表5参照
国際Zoom	11～12人	自宅	1人	Zoom

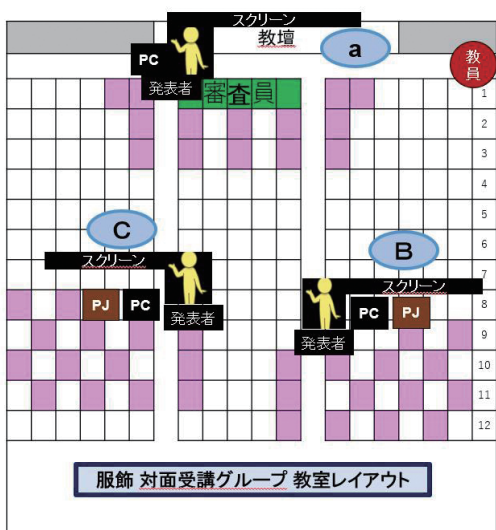
〈図表3〉 服飾芸術科・国際コミュニケーション学科 実施方法

予選時におけるプレゼンテーション聴講パターン(服飾・国際)

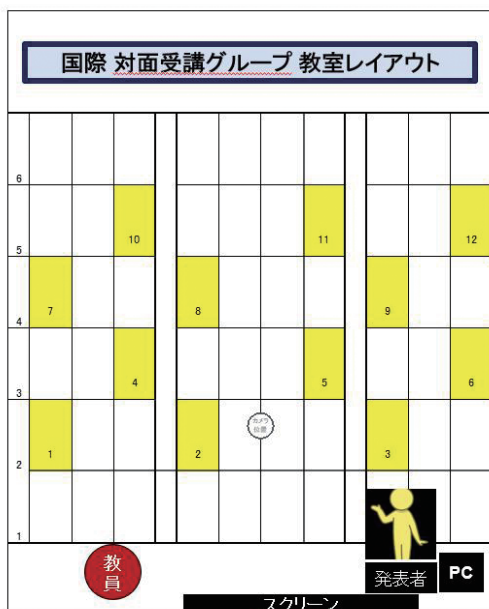


服飾芸術科と国際コミュニケーション学科では統一した発表形式でプログラムを進めたが、使用教室の都合上、発表環境に違いが生じた。服飾芸術科はそれぞれ別グループから集まった16～17人構成のグループが3つ、同一教室内で同時に発表を行ったのに対し、国際コミュニケーション学科は同様に集められた11～12人構成のグループがそれぞれ別教室を使用しての実施となった。

〈図表4〉 服飾芸術科 教室配置



〈図表5〉 国際コミュニケーション学科 教室配置



（2）食物栄養科

予選では5つの発表会場を設け、それぞれ別グループから集まった30人を前に1分間のプレゼンテーションを行うスタイルで実施した。すべての会場において、発表者も聴講者も対面とオンラインの学生が半ずついるため、プレゼンテーションの聴講スタイ

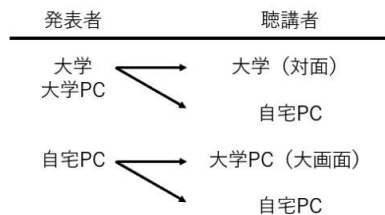
ルは下記の4つのパターン（図表7）であった。本来ならばここで対面とオンラインにおける評価の違い等が客観的に見られるものを予め準備しておくべきであったが時間的に困難であった。この後の分析には本選時に提出されたデータを用いるため、食物栄養科については本選時の発表形式及び教室配置（図表6、8）についても併せて記載する。

〈図表6〉 食物栄養科 実施方法

予選時の形式	聞き手の人数	発表学生場所	教職員	発表環境
対面	30~33人	教室	1人~2人	教室図1参照
Zoom		自宅		Zoom
本選時の形式				
対面	150人	教室	担当教職員	教室図1参照
Zoom	学科全員	自宅	全員	Zoom

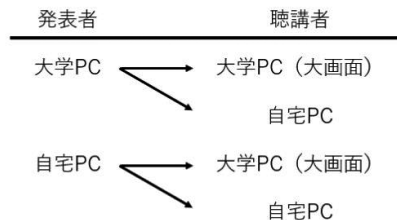
〈図表7〉 食物栄養科 予選教室配置

予選時におけるプレゼンテーション聴講パターン



〈図表8〉 食物栄養科 本選教室配置

本戦時におけるプレゼンテーション聴講パターン



4. データ収集の方法

服飾芸術科および国際コミュニケーション学科においては、予選終了直後にループリック（図表9）に沿った評価表を提出、さらに2週間後に行われた決勝戦終了後に Google Forms を用いてプログラム全体のふりかえりを行った。その中に今回のデータとして使用する予選時に行った各自の発表について

のふりかえりが含まれている。質問項目については、Ⅲの「結果と分析および考察」に記載する。

食物栄養科においては、予選および本選終了後に、プレゼンテーションに対するコメントと、他の2学科と同一のルーブリック（図表9）に沿った評価表を提出させた。ただし、予選時は評価時間が短時間しか設けられなかったため、本選のための練習として実施するにとどめ提出はさせていない。したがって、今回使用するデータは本選時に提出されたルーブリック評価表の数値である。

Ⅲ. 結果と分析および考察：服飾芸術科・国際コミュニケーション学科

学生から提出されたデータをもとに、対面とオンラインでのプレゼンテーションに対しての意識の違いについて整理する。まずは同一方法、同一アンケート（ふりかえり）を実施した服飾芸術科と国際コミュニケーション学科の2学科について分析及び考察を行う。食物栄養科については、プレゼンテーション実施方法およびデータ収集の方法が異なるため、別途Ⅳで行う。

1. 結果と分析

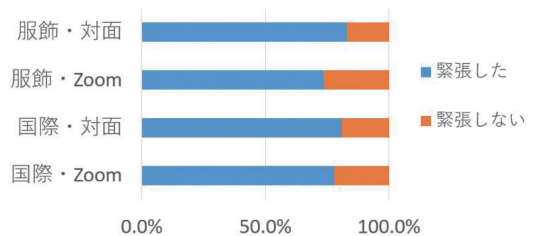
服飾芸術科および国際コミュニケーション学科についてのデータの分析は、Google Formsで行ったアンケートの質問事項に沿って、対面学生とオンライン学生（Zoom）の回答結果を対比しながら進め

ることとする。

（1）緊張の有無

質問5「予選プレゼンテーションの際に緊張しましたか」について

〈図表10〉 「緊張」にかかわる学生の回答



予選プレゼンテーションにおける対面およびZoomにおける緊張の有無

服飾芸術科では、「緊張した」は、対面組回答数71件のうち59件（83.1%）、Zoom組が回答数76件のうち56件（73.7%）となっており、対面組の方が9.4%高い。国際コミュニケーション学科も、「緊張した」と回答した学生は対面組で40件中27件（81.0%）、Zoom組は51件中28件（78.0%）と、服飾芸術科で見られたほどの差はないが、こちらも対面組のほうが3%高い結果となった。

（2）緊張の有無につながる要因

①質問6：質問5で「緊張した」と回答した理由に

〈図表9〉 評価用ルーブリック

評価項目	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
内容	課題を理解していて流れが分かりやすく、かつ聞き手の期待に応える提案内容であり実現性もある。	課題を理解し、かつ内容の流れが分かりやすい。	課題を理解している。	課題を十分に理解していないため、的外れな内容になっている。
資料	情報量が適切で重要なポイントが分かりやすいデザインである。かつ聞き手をひきつける工夫もなされている。	情報量が適切で、かつ重要なポイントが分かりやすいデザインである。	記載している情報量が適切である。	情報量が多すぎたり文字が小さすぎたりするため見づらい。
発表技術	聞き手を意識して声量や速度をコントロールし、アイコンタクトやジェスチャーも取り入れている。さらに「間」を活用して適切な抑揚をつけている。	聞き手を意識して声量や速度をコントロールし、かつアイコンタクトやジェスチャーも取り入れている。	聞き手を意識して声量や速度をコントロールしている。	聞き手を意識できていないため、適切な技術を使わず自分よがりな発表になっている。
発表姿勢	発表内容に対する自信と情熱が十分に感じられ、聞き手の感情に訴えかけている。	発表内容に対する自信と情熱が感じられる。	発表内容に対する自信が感じられる。	発表内容に対する自信や情熱が感じられない。
発表時間	制限時間内に終了でき、かつ各発表項目の時間配分も適切である。	制限時間内に終了でき、かつ各発表項目の時間配分も意識している。	制限時間内に終了できる。	制限時間を超過してしまう。あるいは発表時間を大幅に残してしまう。

ついて

服飾芸術科対面組の回答数71件のうち、上位3件の理由を見ると「人前で話すことが苦手だから」が一番多く、48件（67.6%）、次いで「練習不足だったから」が10件（14.1%）、3番目が「発表内容に自信がなかったから」で9件（12.7%）であった。Zoom組も同じ順位の結果となっているが、「発表内容に自信がなかったから」という回答のみ、対面と比較して約5%低くなっている。

国際コミュニケーション学科でもほぼ同じ傾向がみられるが、特徴的な点として「人前で話すことが苦手だから」と回答した学生が、対面組で回答数40件中27件（67.5%）であったのに対し、Zoom組では回答数51件中28件（54.9%）と、両者の間に12.5%もの大きな差が生じている。どちらの場合も「発表内容に自信がなかったから」「練習不足だったから」という回答が後に続くが、これらの回答率に関して両者に大きな差異は見られない。

②質問7：質問5で「緊張しなかった」と回答した理由について

服飾芸術科対面組回答数11件のうち、上位3位は「何度も練習したから」が1位で4件（36.4%）、次いで「発表内容に自信があったから」が2件（18.2%）、3位は「気にしていなかったから」「自分のできることをやろうと思ったから」「人前で話すことが得意（好き）だから」「もともとそこまで緊張

するタイプではないから」「特になし」が同列で、各1件（9.1%）であった。Zoom組の回答数29件のうち上位3位は「Zoomで目の前に人がいなかったから」が1位で11件（37.9%）、次いで「何度も練習したから」「人前で話すことが得意（好き）だから」が同列で各8件（27.6%）、3位は「発表内容に自信があったから」「自分達が全力で頑張って作り上げたものだから」が同列で各1件（3.4%）であった。

国際コミュニケーション学科では、Zoom組回答数21件中5件（23.8%）が「目の前に人がいなかったから」を選択している。Zoomの場合は、たとえ画面越しに他の参加者の顔が見えていたとしても、実際に聞き手を目の前にした時と比べて明らかに緊張感のハードルが下がることが見て取れる。少数回答の「リラックスできていたから」という内容も同様の理由であろう。また、「何度も練習したから」という回答を選択している割合が、Zoom組では回答数21件のうち3件（14.2%）なのに対し、対面組では回答数11件のうち3件（27.3%）と、2倍近くになっており、対面組のほうが、より積極的に練習を重ねたことがわかる。

③質問8：発表の際にメモや原稿を見たかについて
事前の指示で、学生には原稿は見ないで発表することを義務付けていたが、服飾芸術科で「見た」は、対面組回答数71件のうち46件（64.8%）、Zoom組で

〈図表11〉 プレゼンテーションふりかえり結果

質問	質問項目	選択肢	服飾Zoom	服飾対面	国際Zoom	国際対面
質問6	「緊張した」と回答した方へ質問です。その理由はなぜだと思いますか。（複数回答）	人前で話すことが苦手だから	64.1%	67.6%	54.9%	67.5%
		練習不足だったから	14.1%	14.1%	11.8%	12.5%
		発表内容に自信がなかったから	7.8%	12.7%	17.6%	10.0%
質問7	「緊張しない」と回答した方へ質問です。その理由はなぜだと思いますか。（複数回答）	人前で話すことが得意（好き）だから	27.6%	9.1%	33.3%	54.5%
		Zoomで目の前に人がいなかったから	37.9%		23.8%	
		何度も練習したから	27.6%	36.4%	14.3%	27.3%
質問8	発表の際にメモや原稿を見ましたか。	発表内容に自信があったから	3.4%	18.2%	23.8%	9.1%
		見た	73.4%	64.8%	26.0%	7.1%
		見なかった	26.6%	35.2%	74.0%	92.9%
質問9	発表の際、自分の発声について	大きな声でハッキリ話せた	61.1%	54.3%	48.3%	57.7%
		早口になってしまった	38.9%	43.2%	43.1%	26.9%
		小さな声になってしまった	38.9%	43.2%	5.2%	9.6%
質問10	発表の際、自分のジェスチャー・目線について	聞き手を見ながら話せた	47.3%	45.7%	37.9%	52.5%
		ジェスチャーを使うことが出来なかった	35.5%	28.3%	27.5%	6.6%
		効果的なジェスチャーを加えて話せた	10.8%	19.6%	24.6%	36.1%
質問11	この授業を通してプレゼンテーションの技術に変化はありましたか。	以前と比べ上手になった	38.2%	35.2%	42.0%	52.4%
		成果は感じられないが技術や知識が増えた	59.2%	59.2%	56.0%	40.5%
		以前と何も変わらなかった	2.6%	5.6%	2.0%	7.1%
※回答内容が2つ以上あるものは、その内容を吟味した後、細分化し計上した						

は回答数76件のうち56件（73.4%）となっており、Zoom組の方がメモや原稿を見ながら発表していた学生が8.6%高い。

国際コミュニケーション学科でも同様に、対面組の回答数42件のうち39件（92.9%）が「見なかった」と回答しているのに対し、Zoom組では回答数50件のうち37件（74.0%）に留まっている。

④質問9：発表時の自分の発声について

（複数回答。自由回答にて、回答内容が2つ以上あるものは分解してカウント）

服飾芸術科では、「大きな声」という回答内容を答えた学生がどちらも一番多く、対面組回答数81件のうち44件（54.3%）、Zoom組90件の回答数のうち55件（61.1%）で、Zoom組の方が6.8%高い。「小さな声になってしまった」「早口になってしまった」など、マイナスの内容にふれられている回答を合計すると、対面組、Zoom組とも35件の回答数で、それぞれの割合は43.2%、38.9%となり、対面組の方がネガティブな自己評価をしている割合が高い。

国際コミュニケーション学科では、対面組回答数52件のうち30件（57.7%）、Zoom組回答数58件のうち28件（48.3%）が、「大きな声でハッキリ話せた」を選択している。ほとんどの学生が緊張状態にありながらも、伝えようとする強い意志を持ってプレゼンテーションに挑んでいたことがわかる。特に対面組にその傾向が顕著である。また、Zoom組では「大きな声でハッキリ話せた」と同様に、「小さな声になってしまった」を選んだ割合が対面組より大幅に低い。このことから、Zoomでは音量を意識せずに話していることがうかがえる。

⑤質問10：発表時のジェスチャー、目線について

（複数回答。自由回答にて、回答内容が2つ以上あるものは分解してカウント）

服飾芸術科では、「聞き手を見ながら話せた」は対面組回答数92件中42件（45.7%）、Zoom組（「Zoomのカメラを見ながら話せました」の回答を含む）回答数93件中44件（47.3%）で、両者にはあまり変わらないが、「効果的なジェスチャーを加えて話せた」は対面組18件（19.6%）、Zoom組10件（10.8%）

で、対面組の方が8.8%高かった。「うつむいて」「スライドばかりをみて」などで「聞き手を見る」ことにネガティブな感想は、対面組6件（6.5%）、Zoom組5件（6.5%）、「ジェスチャーを使うことが出来なかった」は対面組26件（28.3%）、Zoom組33件（35.5%）であり、対面組の方が「ジェスチャー」を意識してプレゼンテーションを行っていた様子が伺われる。

国際コミュニケーション学科では、「聞き手を見ながら話せた」がZoom組回答数69件中26件（37.9%）、対面組回答数61件中32件（52.5%）とどちらも一番高く、次いで「効果的なジェスチャーを加えて話せた」がZoom組で17件（24.6%）、対面組で22件（36.0%）という結果になっており、双方とも対面組のほうがはるかに高いポイントを示している。一方、ネガティブな感想である「ジェスチャーを使うことが出来なかった」を選んだ学生はZoom組19件（27.5%）、対面組4件（6.6%）と、こちらはZoom組の割合が高い。これらの結果から、服飾芸術科と同様、対面組の方が目の前の聞き手を意識し、ジェスチャーなどを多用しながら「伝える」ことにより注力していることが分かる。

⑥質問11。「この授業を通してプレゼンテーションの技術に変化はありましたか」について

服飾芸術科では、「以前と何も変わらなかった」が対面組回答数71件中4件（5.6%）、Zoom組回答数76件中2件（2.6%）、「以前と比べ上手になった」がそれぞれ25件（35.2%）、29件（38.2%）、「成果は感じられないが技術や知識が増えた」42件（59.2%）、45件（59.2%）で、両者にはほぼ変わりなく、うまくなった実感、技術や知識が増えた実感を得ていた。

国際コミュニケーション学科では、「以前と比べ上手になった」と回答した割合は、Zoom組回答数50件中21件（42.0%）、対面組回答数42件中22件（52.4%）となっており、対面で発表したほうがより上達を実感できることが分かる結果となった。

2. 考察

IIの分析結果から、Zoomと対面のどちらの手段であっても、学生にとってプレゼンテーションとは

大きな緊張感を感じる場であることが分かる。しかし、実際に教室内で聞き手を目の前にした場合の方が、Zoomを通して行うプレゼンテーションよりもはるかに緊張度が増すことが見てとれる。その緊張が何に由来するものなのか、以下に考察を進める。

「緊張した」と回答した学生の理由をみると、「練習不足だったから」、「発表内容に自信がなかったから」など個々の学びの取り組み内容が原因のものと、「人前で話すことが苦手だから」といった心理的側面に関わるものとに分けることができる。一方で「緊張しなかった」学生の理由をみると、学びの取り組み内容である「何度も練習したから」、「発表内容に自信があったから」といった回答と、心理的側面である「人前で話すことが得意（好き）だから」に加え、Zoomで発表した学生には「Zoomで目の前に人がいなかったから」という発表環境が、その理由としてあがってきた。

そこで対面とZoomという発表環境の差に焦点をあてて理由の回答を振り返ってみると、「緊張した」と回答した学生は服飾芸術科では、対面のほうが約10%も高く、国際コミュニケーション学科でも3%ほど高い。「緊張しなかった」と回答した学生も対面とZoomではほぼ同率の開きがあることから、Zoomでのプレゼンテーションの方が緊張度は低いことがうかがえる。Zoom、対面とも発表の制限時間、聞き手の人数、原稿の暗記という条件はほぼ同じであったが、Zoom発表者は自宅というリラックスできる環境の中、おそらく座ってカメラに向かい、マイクで発表する。一方、対面発表者は大教室の中で多くの視線が自分に向かっていることを感じながら、聴衆に目を配り、比較的大きな声を出して発表することになる。慣れないことをする緊張感とともに、時間を気にしながら同時に複数のことに神経を使う対面での発表は、緊張した理由に心理的側面の「人前で話すことが苦手だから」がZoomに比べ約服飾芸術科で4%、国際コミュニケーション学科では12%も高かったことは、無理のないことだと思われる（図表11）。Zoom発表者で緊張しなかったと回答した理由に一番多かったのが「Zoomで目の前に人がいなかったから」であることから、環境は心理的側面に影響を及ぼすものであり、それが発

表に反映される要素になるといえるだろう。その証拠として注目したいのは、同じ対面形式でありながら「緊張した」という回答に2学科間で7%もの開きがある点である。II-3の発表形式で記した通り（図表4、5）、服飾芸術科の場合、自分の発表を目の前で聞いているメンバーは16~17人と、国際コミュニケーション学科とそれほど大きな違いはない。しかし、周りの教室環境は両者で大きく異なる。服飾芸術科では大教室を利用して発表を行ったために、同じ教室内にその3倍もの人数の学生がいる。さらに、他のグループの発表の音が耳に届いている中でプレゼンテーションは、否が応にも緊張感が高まって当然と言えよう。

〈図表12〉 発表条件・環境におけるZoomと対面の異同

		Zoom	対面
条 件	1	発表時間の制限：服飾：2分以内 国際3分以内	国際3分以内
	2	聞き手の人数：服飾：16~17名 国際：12名	国際：12名
	3	原稿は暗記する	
環 境	1	座って発表することもできる	立って発表しなければならない
	2	原稿を見ることもできる	原稿を見ることはできない
	3	聞き手の視線を気にしなくてよい	聞き手の視線をあびる
	4	声は小さくてもマイクで調節できる	聞こえやすい音量を意識しなければならない
	5	時計を視野内に置き時間調整ができる	時計を見ることは難しい
	6	リラックスした場所で発表ができる	教室で出席者の前で発表する（場所は選べない）

以上のように環境に焦点を当ててみれば、Zoomのほうが心理面においては有利であるということが出来る。しかし、ZoomにはZoom特有の緊張感というものも存在する。国際コミュニケーション学科の自由記述に「パソコンが重くスライドが急に動かなくなってしまうたり、同じブレイクアウトルームの子のPCトラブルで順番が急に変わったりして焦ってしまった」と記した学生がいたが、こういった機材のトラブルなどは大きな緊張を生む原因になりやすいことを示している。

次に個々の学びの取り組み内容の側面から結果を検証する。「緊張しなかった」と回答した理由としては、対面、Zoomともに「何度も練習したから」

が高い回答数を獲得している。言い古されてきたことではあるが、練習によって緊張感はある程度コントロールできることが証明された結果と考える。特に、対面組でこの回答を選んだ割合が高く、服飾芸術科で約10%、国際コミュニケーション学科では13%近くも Zoom 組を上回っている。人の前に立たなければいけないという緊張感が繰り返しの練習につながり、練習を重ねることで今度は人前に立った時に起こる緊張感や恐怖心さえも克服するのである。その根拠となるのが、質問9で「大きな声でハッキリ話せた」と答えた回答率である。特に大きな緊張を感じているはずの対面の学生が「何度も練習を重ねて」当日に臨んだ結果、服飾芸術科で54.3%、国際コミュニケーション学科で57.7%という半数以上もの数値を記録していることは練習の成果に他ならない。

さらに、声の大きさやトーン、視線やジェスチャーといったプレゼンテーションにおけるさまざまな技能が、発表の場においてどれだけ表現できたのかという側面から検証を進めてみると、Zoom での発表は、聞き手の存在をあまり意識することなく行なわれていたことがわかる。先述した発表環境にもつながるが、Zoom では周りに人の気配を感じることなく、自分のペースを保って発表できる。そのため、手元が映らない安心感から原稿に目が行ってしまった学生も少なくない。マイクの力を借りれば大きな声を出す必要もなく、逆にそれほどの音量で話さなくても、聞き手にはほぼ問題なく配信される。ジェスチャーや視線についても同様で、相手から見つめ返される緊張感を感じることもなければ、手元を軽く動かすだけでも画面の向こうの相手にはそれなりの動作に見えてしまうという利点がある。こういったオンラインの特性を有効に活用すれば、緊張感のハードルが下がり、余裕をもってプレゼンテーションに臨めることからZoom 組の自己評価も、聞き手に与える印象も高くなるのも当然の結果と言える。しかし、質問11で問われた上達の実感に関しては、より強い緊張感を乗り越えた対面組の学生のほうが高い結果となった。

IV. 結果と分析および考察：食物栄養科

食物栄養科では先に示した通り、予選時において各教室の発表者過多により十分な評価時間の確保が困難であったため、評価表の提出は求めなかった。その代わり、本戦時に回収した評価表に基づいて分析を試みた。発表スタイルを同条件にするため対面発表者も学内の別教室から Zoom によるプレゼンテーションを行った。II-3 (2) に記載した4つのパターン(図表8)ごとに、ルーブリック評価表(図表9)から見られる評価の違いについて以下に考察する。

〈図表13〉 食物栄養科 評価表分析結果

評価表における評価の平均と標準偏差 (のべ評価者数1,153)

発表者	聴講者	内容	資料	発表技術	発表姿勢	発表時間
大学PC	大学 (大画面)	3.47 ± 0.61	3.50 ± 0.56	3.14 ± 0.72	3.42 ± 0.61	3.31 ± 0.68
大学PC	自宅PC	3.43 ± 0.62	3.43 ± 0.60	3.05 ± 0.71	3.32 ± 0.67	3.20 ± 0.69
自宅PC	大学 (大画面)	3.53 ± 0.60	3.59 ± 0.57	3.38 ± 0.63	3.54 ± 0.56	3.58 ± 0.54
自宅PC	自宅PC	3.56 ± 0.55	3.52 ± 0.61	3.33 ± 0.61	3.49 ± 0.59	3.47 ± 0.59
全体平均		3.51 ± 0.59	3.52 ± 0.59	3.26 ± 0.67	3.46 ± 0.61	3.43 ± 0.63

まず、どの項目も標準偏差のばらつきがあるものの全体として数値は高く、学生たちはピア精神のもと興味をもって評価したものと思われる。また、全体平均と比べた際にほぼすべての項目において自宅発表者の評価の平均が若干高かった。食物栄養科の学生はほぼ全員がパソコンかタブレットで聴講しているため、デジタル世代と言われる学生たちにとってオンラインでの発表の方が緊張することなくできたのかもしれない。また、評価項目別に見てみると、内容と資料の項目の平均が高く、実際に発表を聴講した教員も驚かされるほど、材料の工夫であったり、試作や原価計算まで多岐にわたる内容が含有されていた。一番低い項目は発表技術であったが、コメントに多く記載されていたものとしては、原稿を見て発表しているというものである。原稿は見ないように指導していたが、短期大学入学後はじめて大勢の前で行う発表であったため緊張もあったであろうし、今後の成長に期待するところである。

最後に、今回の考察としての決定付けまでには至らないが、この学生の発表と分析を通して若干では

あるがオンラインプレゼンテーションの有用性が見えた。もちろん、そのベースには機材環境や通信環境が整っていることがあるが、これはコロナ禍で続くオンライン授業の副産物であるかもしれない。

V. まとめ

本研究を始めるにあたり、対面とオンライン、それぞれで行うプレゼンテーションの印象の差異に着目し、学生の緊張感や心理状態からその差が生じるのではないかとのリサーチクエスションを立てた。学生の自己評価とふりかえりを分析、考察した結果から答えを導くとするならば、その推測に概ね間違いはない。しかし、オンライン発表者の出来栄がより高いように感じた点については必ずしも正解とは言えない。発表環境によって緊張感のハードルが下がったことに加え、機材の強力な助けも手伝って、画面の向こう側にいる教員をはじめとする視聴者からはより上手に「見えていた」というのが正解である。ただ、質問11（図表11）の結果から分かるようにオンラインでの発表を経験した学生本人が「以前とは変わった」、あるいは「上手になった」と自信を得ていることは見逃してはならない。

一方で、より大きな緊張感の中で発表をしなければいけなかった対面組の学生たちは、より多くの練習を積み重ね、自らその克服に向けた努力を重ねる傾向にあることが分かった。より高い目標イメージを持ってプレゼンテーションに挑んだ分、事後に感じる達成度は、オンライン組より高くなったのであろう。

以上の考察から、プレゼンテーション教育の導入部分にはまずオンラインでの発表を活用するとより効果的な成果を得られる可能性が高いと思われる。緊張感のハードルを下げプレゼンテーションに対するネガティブなイメージを払拭したうえで、次の対面での発表へとコマを進めることで、より高い満足度や完成度に近づくことが予想される。最初に記した通り、プレゼンテーションには大学生の未来を明るくする力がある。学生たちが自らの能力を開花させ、主体的に自らの目指す未来を引き寄せられるよう、来年度以降に向けたプログラムの再構築をすすめて行きたい。

参考文献

- ・仲川浩世（2020）「オンライン授業における大学初年次教育：学習者の気づきを促して」『大阪女学院短期大学紀要』、第50号、pp.167-181
- ・本多麻子（2011）「スピーチ場面における緊張、不安および心拍数の時系列変化の関連」『白鷗大学教育学部論集』、5（1）、183-195
- ・村上和繁・垣東弘一・正木幸子・横山宏（2012）「リフレクションに着目したプレゼンテーション教育手法 —— 8つの教育のタイプ——」『園田学園女子大学論文集』、第46号、pp.254-264
- ・村木桂子・吉川尚志・白川はるひ・苗村晶彦・中村公子・高橋佳子（2020）「短期大学における産学連携オンライン授業の試み」『戸板女子短期大学研究年報』、第63号、pp.63-78
- ・文部科学省（2021）『大学における教育内容等の改革状況について』
Retrieved from
https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf
- ・山田嘉徳・岩崎千晶・森朋子・田中俊也（2016）「初年次教育での学習活動における学びと評価をめぐる教授・学習論的検討」『関西大学高等教育研究』、第7号、pp.79-90